大江戸虚言物語

小夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大江戸虚言物語

【Ｎコード】
Ｎ０８３２Ｚ

【作者名】
小夏

【あらすじ】
お雪を拾ったのは自らを野狐と名乗る男だった。

壱（前書き）

完結するように頑張りますのでよろしくお願いします。

壱

お雪は自分の小さな手を口元に覆うようにして、温かい息を吹き吐けた。

かじかむ手を擦りながら、今日の寝床はどうしようかと考える。

季節はもう秋の終わり、今のような夜半には息も白くなる寒さだ。

お雪のような１２の娘が耐えられるような夜ではなくなってきた。

ふらりふらりと今にも倒れそうな足取りで、人気のない夜の江戸を彷徨う。

どこかに適当な社がないかと必死に目を凝らしながら道を進む。

程なくして、町外れの寂れた場所にこれまた寂れた稲荷神社を見つけたお雪は、心底安心したように微笑んだ。

内心飛び上がらんばかりだったが、声をだすことさえ諦めるほどくたくたに疲れていたのだ。

それなりの大きさの稲荷神社だったが、赤かったろう鳥居は変色し、屋根は一部が崩れ落ち、柱は辛うじて崩れ落ちるのを免れているような有様だった。

しかし、そんな有様こそが今のお雪にとっては、極楽のように思えた。

弐

すぐさま、苔むしたお稲荷さんに一礼して壊れた賽銭箱の後ろにうずくまって体を休める。

震える手に息を吹きかけて、また手を擦る。その繰り返しで寒さをしのぐ。

幸い、壊れた賽銭箱が良い風除けになって、冷たい刃のような風は直接あたらない。

少しは寒さがましになった頃、お雪はふと賽銭箱が気になった。

正確にはその中身が気になったのだ。

もしかしたらまだ銭があるかもしれない、そんな一縷の望みを持って賽銭箱の横の大穴に手を突っ込む。

しばらく手を入れて探っていたのだが、分ったのは一銭も賽銭箱には入ってないということだけだった。

少し期待していただけにがっかりもしたが、よくよく考えてみると当然なのかもしれないとお雪は思った。

こんな寂れた稲荷に参る人が少ないというのもあるだろうが、それ以前に賽銭箱には横に大穴が開いてるのだ。

きっと、誰かがとっくの昔に賽銭箱を壊して中身をごっそり持って行ったに違いない。

そこまで、考えて己の考えに虚しくなった。

浅ましい自分は、きっと少しでも賽銭箱に銭が残っていたら、ためらわずに盗む気だったのだ。

否、ためらいはしたかもしれない、しかし最終的には、人様の願いがこもった銭に手をかけるのだ。

それは、一晩泊めてもらっているお稲荷さんをも裏切る行為なのに。

参

そんな、してもいない行為にお雪はどんどん鬱々としていく。

骨にまで染みるような寒さを防ぐため、手や足を擦り合わせてはいるが、心はどんどん冷たくなっていった。

ただただ、己が惨めだった。

少し前まではこんなんじゃなかったのだ。

お雪は自分の格好を確認して唇の端を強く噛んだ。

こんなふうじゃなかった。

少し前までは、こんな枯れ枝のような体ではなかったのだ。
もちろん沢山贅沢ができたわけじゃないけど、おとっつぁんの稼ぎで家族三人十分に食べていけた。

着物だってこんな泥まみれのものじゃなかった。
おっかさんと一緒によく洗濯したのを覚えている。

お風呂にだって家族三人よく湯屋にでかけてた。

こんな、みすぼらしいお雪は記憶の何処を探してもいなかった。

どうしてこうなったんだろう？

幸せだった頃の記憶を思い返しながら、どうしてを繰り返していく
お雪。

眠りに落ちるその時まで、とうとうお雪は涙の一つも見せなかった。

肆

そのまま数刻、眠りに落ちるお雪。

しかし、冬の夜はそう優しくはない。
眠りに落ちたと言ってもごく浅いものだ。

薄ぼんやりとした意識の中で、衣擦れと足音が聞こえる。

ゆっくりと近づくそれはお雪が目を覚ますのには十分だった。

しかし、起きてはいても、悴んだ体は動かすことも出来ず、目蓋を開ける力も入らない。

そうしているうちに、気配はすぐ近くにまで来てしまっていた。

足音はぴたりと止まり、気配はお雪を覗きこむようにして止まっている。

「何だこれは？おい鴉、縁起の悪い物が転がっているぞ」

若い男の声だと、お雪が思った瞬間だった。

「っ」

声が出せぬほどの、鋭い痛み。

冷え切った体が軋み、息をまともにすることも出来ないのだ。

お雪の目が薄く開いたが、それは薄ぼんやりとした景色を一瞬写した後にすぐに閉じてしまった。

伍

「なんだ、生きていたのか」

薄く目を開けた童女をチラリと見た男は、もう一度、童女を鞠のように蹴り上げようとする。

「いやいや、野孤さんナニとどめさそうとしてるんでェ？」

「邪魔だろう？」

「だからって、二度も蹴るこたぁ無いでしょう」

「そうなのか？」

不思議そうに首を傾げる男、”野孤”に”鴉”は長いため息をついた。

「野孤さん・・・」

「なんだ、何か問題でもあったのか？」

「いえ、特に問題はありゃしやせんぜ」

そうか、と野狐は一人納得したように頷くと、袖から匕首を取り出して、その刃先をお雪の心の臓の上にもっていく。

そして不自然にハタと動きを止めた。

そんな野狐の行動を鴉は、その後に残る骸の処理をどうしようかと考えながら見ていた。

骸は冬とはいえ直に腐る、腐れば虫が沸く。

そこらに埋めるのはいいが、臭いもきつくなるのだ、穴掘りは重労働になるだろう。

そう考えると、鴉は何故か童女に罪悪感が沸き俯く。

そして、鴉が次に顔を上げた時に見たのは、

奇妙なものだった。

野孤が童女を抱え上げていたのだ。

脇に両手を差し入れて持ち上げ、顔と顔を突き合わせている。

無表情で童女の顔をじっと見たかと思うと、そのまま抱きかかえてしまった。

そのまま、堂々と本殿の扉を開ける。

「ちょっと、野孤さんそんなんどうするおつもりなんでおりやすか？」

その声に、野孤はチラリと後ろを振り向く。

「気に入った飼う」

そう一言、言い残しばたりと戸を閉じてしまった。

「・・・」

飼うというならば、どこぞにに売るわけではないのだろう。

ならば、何のためにと、鴉は頭をひねる。

どれだけ頭を悩ませても分らない、しかし、だからといって野孤が稚児趣味だということではないだろう。

ここ数日、そこらの娘も夜鷹も、普通に相手をしていたとしっかり記憶しているからだ。

普通にというよりは、袖を引かれれば相手をし、好きだと言われれば相手をするような感じなのだが。

あっちにふらふらこっちにふらふらと、女をとっかえひっかえし、刃傷沙汰までおこした男。

町を歩くだけで、女から声をかけられる様な色男だ。

まさしく、女はより取り見取り。

別に野孤が稚児趣味でもいいが、まさかあんな薄汚いなりの童女を相手にすることは無いだろう。

では、何故飼うのだとい初めの疑問に突き当たる。

下賤な小悪党には下世話なことにしか思考が行かず、結局、野孤が言った”飼う”の意味は全く持って分らない。

その内、びゅうびゅうと吹きつける風に耐えられ無くなり、中のお堂に入ろうとしたが、野孤のきつい一睨みに負けて、すごすごとま

た外に出た。

無言の命令に負けたのだ。

「へいへい、あっしは見張りですかい」

納得がいかなくても、やらねば首が飛ぶ。

全くもって理不尽な力関係だ。

ぼやきながらお堂に続く階段に腰掛けた。

頬杖をつき、ぼんやりと澄み切った夜空を見上げる。

相変わらずの風でぶるりと体を震わせながら、ここ数日の星巡りは最悪に違いないと確信する。

ここら一帯で知らぬものなどいないという、稀代の大悪党野孤。

それがナニを思ったのか、気まぐれに童女を拾ったのである。

明日は槍が降るかもしれない、と両手を合わせて”どうかあっしにはあたりやせんように”と信じてもいない神に祈った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0832z/

大江戸虚言物語

2011年12月11日02時50分発行